

# Labels at the Interfaces: On the Notions and the Consequences of Merge and Contain

林, 慎将

<https://hdl.handle.net/2324/4474913>

---

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



|        |                                                                                                                             |      |      |       |
|--------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|------|-------|
| 氏 名    | 林 慎将                                                                                                                        |      |      |       |
| 論 文 名  | Labels at the Interfaces: On the Notions and the Consequences of Merge and Contain<br>(インターフェイスにおけるラベル: 併合と包含の概念及びその帰結について) |      |      |       |
| 論文調査委員 | 主 査                                                                                                                         | 九州大学 | 教授   | 西岡 宣明 |
|        | 副 査                                                                                                                         | 九州大学 | 教授   | 大橋 浩  |
|        | 副 査                                                                                                                         | 九州大学 | 講師   | 太田 真理 |
|        | 副 査                                                                                                                         | 九州大学 | 名誉教授 | 稲田 俊明 |

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

生成文法理論は、1990年代以降ミニマリストプログラム(MP)の研究戦略をとることにより、人間言語の本質の解明に向け着実に進展してきた。近年、最も大きな影響力をもつのは、構造構築のための併合操作と解釈に必要な構造のラベルを切り離し、ラベルは、最小探査に基づくアルゴリズムにより決定されるという Chomsky (2013, 2015) が提案したラベル理論である。本論文は、構造を解釈する際、併合が作り出す集合関係が基本的な関係概念であることを提案し、集合が持つラベルの解釈上の働きを独自に提案することにより、日本語、英語の関係節と疑問文に対し、より原理的な説明を与えるものである。

第 1 章で、MP の方針、目的を概観し、本論文の概略を述べた。第 2 章では、生成文法理論の進展と現行の枠組みである Chomsky (2013, 2015) を概観し、その問題点を指摘した。第 3 章において、現在、要素間の統語関係を捉えるものとして広く浸透している C 統御の問題点を指摘し、代案として、併合が作り出す集合のラベルに基づき集合内の要素が解釈される解釈規則を提案した。第 4 章において、第 3 章での提案をもとに、Chomsky (2013, 2015) の問題解決のための新たな提案を行い、英語と日本語の例を用いて実証した。第 5 章では提案した枠組みを用いて関係節を分析した。まず、英語の制限関係節を分析し、補文標識 *that* が疑問文と反対の分布を示すという難問に対して、対併合とその不可視性 (Chomsky (1995, 2004)) を用いた解決方法を示した。そして、次に主語の制限関係節において *that* を省略することができない現象に加え、主語が話題化できない事実、*that* 節の *that* の補部 TP を移動させることができないという反局所性制約 (Abels (2003)) をラベルの概念を用いることで、自由併合仮説の中で再定式化できることを示した。また、英語の非制限関係節の制限関係節と異なる特性は、反循環的併合を仮定することで導出できることを示した。さらに、英語の自由関係節に関し、先行研究の理論的問題を指摘し、ギリシャ語、ブルガリア語の観察に基づき、自由関係節に含まれる *wh* 演算子は定表現の解釈が保証されることにより説明できることを示した。最後に、Kuroda (1999) の分析を本論文の提案に組み込み、述語と名詞との関係を保証するものとして集合が寄与していることを提案して、日本語の主要部内在型関係節 (HIRC) を分析した。この際、ギリシャ語、イタリア語の観察から、本論文での提案は日本語のみにとどまるものではなく、言語一般に拡張できることを示した。第 6 章では、疑問文において、*wh* 演算子が義務的に文頭に移動する英語と、*wh* 演算子の義務的な移動を含まない日本語は、ラベルの解釈条件以外は同じメカニズムで分析されることを示した。ま

た、直接包含と単なる包含要素の違いに着目し、英語の *wh* 演算子の随意的な作用域や名詞の持つ随意的な格が許されるか否かはこの違いに基づくことを示し、*wh* 島の効果、基準凍結の効果が導かれることに加え、英語と日本語の *wh* 島の効果の異なる振る舞いも説明できることを示した。第 7 章は、論文の総括である。

本論文の最大の特徴と利点は、先行研究を入念に吟味したうえで、人間言語で不可欠と考えられる 1. 併合、2. 併合が作り出す集合及びそのラベル、3. 集合間の包含関係の三つの基本的概念に基づき、理論を構築し、ラベルが構造の解釈条件として機能していると考ええることで、MP の精神を最大限に反映した説明的妥当性の高い理論を構築することに成功し、MP ならびにラベル理論の今後の進展に大きく貢献した点にある。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。